

Title	<原典翻訳>ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースイ ー著 『被造物の驚異と万物の珍奇』(6)
Author(s)	守川, 知子; ペルシア語百科全書研究会
Citation	イスラーム世界研究 : Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies (2013), 6: 549-570
Issue Date	2013-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/173269">https://doi.org/10.14989/173269</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー著『被造物の驚異と万物の珍奇』(6)

守川 知子\* 監訳  
ペルシア語百科全書研究会\*\* 訳注

(p.306) 第5部 樹木、果実、香草について——アルファベット順に配列される

至高なるアッラーのいわく、「そこに生長させるものには、穀物、またブドウや青草、オリーブやナツメヤシ、繁茂した庭園、果物や牧草(がある)」[Q80: 27-31]。

知れ。創造主は世界中にさまざまな樹木をお創りになった。あるものはチーク (sāj) のように丈が高く、あるものはイチジク (anjīl) の木のように低い。あるものはヒョウタン (kadū) のように茎が細く、あるものはクルミ (jawz) のように幹が太い。果実のうちのあるものは、クルミやアーモンド (bādām) のように実の外側に固い部分があり、あるものはナツメヤシ (ḥurmā) やグミ (ḡubayrā) のように内側に固い部分がある。あるものはイチジクやシトロン (turanj) やクワ (firṣād) のように外側も内側も好ましく、あるものはコロシントウリ (ḥanzal) やキョウチクトウ (difṭī) のように外側も内側も怪しからぬものである<sup>1)</sup>。

さて、そのうちの一部の特性について言及していこう。至高なる創造主の完全なるお力を知ることができるように。

[第1章 樹木、果実、香草の驚異]

<アリフ (al-alif) の項>

「シトロン (al-aturanj)」は、背丈は低くもなく、高くもない。芳しい匂いや香りがあり、美しい色をしている。心臓を強くする。その皮は練り薬 (ma'jūn) に使われ、気分を良くする。シトロンはすべてが役に立ち、捨てる場所はまったくない。

[逸話]

次のように言われている。

ある王が数人の賢人を監禁し、看守に言った。「彼らにパンと、彼らの選ぶつけ合わせを与えよ。」  
賢人たちはシトロンを選んだ。

王は尋ねた。「これにはいかなる英知があるのか?」

彼らは言った。「その皮は芳しく、中には「食べられる」実があります。またその種子は油になります。」

王は言った。「彼らをケルマーンに連れて行け。」

\* 北海道大学大学院文学研究科准教授

\*\* 本研究会については『イスラーム世界研究』第2巻2号(2009年、198-204頁)の監訳者による「解題」に記したが、最初の訳注刊行から3年以上が経過し、研究会メンバーに多少の変動がある。これまでおよび現在のメンバーは、二宮文子、杉山雅樹を中心に、和田郁子、塩野崎信也、小倉智、大東敬典、石田友梨、福田菜穂、水江平、早川尚志であり、京都大学大学院文学研究科西南アジア史学研究室を中心に、同アジア・アフリカ地域研究研究科や神戸大学大学院文学研究科の院生が参加している。

1) 後述されるように、イチジク(無花果)やシトロンは強壯剤など薬として有効であるが、一方のコロシントウリ(夾竹桃)は有毒なことから、このように表現されているのだろう。

彼らはそこへ行き、木を植えた。[ケルマーンは] 栄えた。

次に王は、山の上に行くよう、彼らに命じた。(p. 307) 彼らは噴水を造り、山を住みやすくした。王は〔再び〕牢に入るよう命じた。彼らは〔牢の中で〕錬金術を行い〔生活した〕。王は言った。「彼らを解放せよ。学のある者は、どこへ行っても困らないものだ。」

知れ。シトロンの皮は強い熱質であり、その果肉は強い冷質である。火と水が互いに合わさっているのである。

「コクタン (黒檀) (ābnūs)」は不思議な木材である。誰もこの木の自生地を見たことはなく、どこに生えているのかも知らない。海中を漂ってくるので、人々はそれを引き上げる。貴重な木材であり、火にくべると芳香を放つ。粉末にして目に入れると、目の白濁を取り、すばらしい輝きを与えて〔目がよく見えるようになる〕。膀胱の中の石を砕き、その屑は小水に溶けて〔体外に排出される〕。黒檀ですり鉢を作り、それで調合した目薬は目に非常に効果がある<sup>2)</sup>。

「ギンバイカ (銀梅花) (al-ās)」は〔ペルシア語の〕「ムールド (mūrd)」のことである。祝福された香草で、芳しい香りが悪臭を打ち消す。ギンバイカの油は髪を黒くし、長くする<sup>3)</sup>。ムーサーの杖は天国のギンバイカでできたものだったと言われている。また、ルームには1本のギンバイカの木があり、世界中でそれより大きなギンバイカはないと言われる。春には花が咲き、その香りを嗅いで眠りにつくと、誰もが夢精を体験する。ギンバイカとザクロが近くに植えられると、互いに〔交配して〕実を結ぶ。

「人間草 (isbarang)」<sup>4)</sup> は「〔竹の〕鳥 (Jazīra[-yi ḥayzarān])」の〔砂の〕細かな砂漠に生える植物である。人の姿のように地面から突き出ている。顔、髪、手、足、口、目、すべてがはっきりとしている。ただ〔人間と異なり〕動きまわることはない。これと同じようなものに、ラービース (LABYS) の山上の木々がある。それは大きな葉をつけ、いずれの葉にも人間の姿がある。その理由は創造主のみがご存じである。

#### <バー (al-bā') の項>

「スオウ (蘇芳) (al-baqam)」は、ラームニーの鳥 (Jazīra-yi Rāmūnī)<sup>5)</sup> に生えている木である。種を蒔かずとも、勝手に生えてくる。(p. 308) イナゴマメ (ḥarnūb) のような実を結び、とても苦い。もし誰かが毒を盛られたならば、スオウの根を粉末にしてその者に与えると回復する。この枝

2) 目に対する薬効については、『医学典範』がほぼ同様の内容を記している。また、黒檀が結石を溶かすという内容については、10世紀あるいは11世紀に書かれたペルシア語の植物誌『薬用植物の書 (al-Abniya 'an ḥaqā'iq al-adwiya)』に同様の記述がある [Ibn Sīnā, *al-Qānūn fī al-ṭibb*, Beirut, n.d., vol. 1, p. 259; Muwaffaq al-Dīn Abū Maṣū'ir 'Alī al-Harawī, *al-Abniya 'an ḥaqā'iq al-adwiya, yā Rawdat al-uns wa manfa'at al-naḥs*, Ed. A. Bahmanyār, Entešārāt-e Dānešgāh-e Tehrān, Tehran, 1968, p. 38]。

3) 『医学典範』と『薬用植物の書』に同様の薬効が記される [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 245; Muwaffaq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, p. 14]。

4) ビールニーの『医学における薬物の書』では、マンドレイク (lufāh) の別名として sābīzaj / sābīzagh という名称が挙げられている。本書での isbarang はそのバリエーションあるいは誤写であろう [Bīrūnī, *Kitāb al-saydana fī al-ṭibb*, pp. 327, 558–559]。本書巻末のミーノヴィー氏の註でも、「isbarang = mardum-giyā」と注記されている。

5) 『中国とインドの諸情報』では、ラームニー鳥には「多くの象が住み、また蘇芳木や竹があり、鳥には人食い人種が住む」と記される。この鳥は、現在のバンダ・アチェのあたりと推定されている [『中国とインドの諸情報』(家島訳注)、1巻29、96頁]。

を使って衣服を染色すると、すばらしい赤色に染まる。スオウはこの島から世界中に運ばれる。

「トリカブト (biṣ)」は致死性の毒をもつ植物である<sup>6)</sup>。たとえ少量でも口にすると死に至る。このトリカブトが生えているところはどこでもガジュツ (紫ウコン) (jadwār) が伸びており、トリカブト [の植生] を抑えている。つまりトリカブトから水分を奪い、干からびさせるのである。もしガジュツがなければトリカブトが生い茂り、四足獣を絶滅させてしまっていたであろう。トリカブトは王たちの宝庫に秘蔵される。ウズラ (summān) はそれを食べて太る<sup>7)</sup>。だが、もし人や象がマスタードの種 (ḥardal) ひと粒ほどであっても [それを] 口にすると、死んでしまう。言われているところによると、ある者が [トリカブトの] 下を掘り、根を取り出したところ、たちまちに死んでしまった。

「バルサム (balasān)」はミスルにある木である<sup>8)</sup>。世界中でまさにその木1本しかなく、その場所は「アイン・シャムス (‘Ayn al-šams)」<sup>9)</sup> と呼ばれる。その根を別の場所に移して育てる。木の先端を切ると水が滴るので、[人々は] その水を瓶の中に入れる。わずかしかなかく、貴重である。

その枝は「バルサム香 (‘ūd al-balasān)」と呼ばれ、その種は「バルサム粒 (ḥabb al-balasān)」と呼ばれる。その油は「バルサム油 (duhn al-balasān)」と呼ばれ、麻痺、痺れ、[体内に溜まる空気から生じる] ガス (bād-hā) に効能がある。この油は王たちの宝庫に秘蔵される。バルサム香もまた貴重なものであり、薬売りは [単なる] 枝を「バルサム香だ」と言っていて売っている。[バルサム] 油は水に沈む。頭に塗りつけると足裏から匂いを放ち、足の裏に塗りつけると、その効果は頭骨に現れる。影響や作用の強さは驚くほどである。

次のように言われている。カーヒラ (カイロ) の町に4アラシュ四方ほどの土地がある。そこにはニラ (gandanā) に似た緑色の草が生えている。毎年1回 [それを] 刈り取り、絞る。それが「バルサム油」と呼ばれるものであり、世界中でまさにその場所にしか生えていない。それは魂に力を与え、病を打ち消す。1ディルハムがジャアファリー金貨<sup>10)</sup> 10ディーナールで取引きされる。

[また] ある者は言う。シリウス星が昇る時期にその根元を切ると、この油が流れ出す。[その油は] 舌をひりひりさせる。(p. 309) 縫い針をその中に浸してから火にかざすと燃えあがる。ニラに

6) サンスクリット語の viṣa に由来する。この語は主にインド方面で使われたようで、ペルシア語の他にもヒンディー語、ベンガル語などでは、トリカブトや毒の意で用いられている [R. N. Chopra (et al.), *Glossary of Indian Medicinal Plants*, Council of Scientific & Industrial Research, New Delhi, 1956, p. 4]。もっともペルシア語ではトリカブトは「[tāj] al-mulūk (王たちの冠)」の呼び名が一般的である。

7) アラビア語の「太る」という動詞の語根は SMN であり、「ウズラ」と同じ語根である。同様の内容が、『医学典範』に見られる [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 276]。

8) バルサムは一般的には樹脂の一種を指すが、ここでは樹木として取り上げられている [Mu‘īn: Balasān]。イスタフリーは、「フスタートの近郊には、棒切れ (quḍbān) のような、『バラサーン』と呼ばれる植物を育てる畑がある。バラサーンからは『バルサム油』が採れる。それは世界中でここでしか [存在が] 知られていない」と記す。バルサムがミスルのアイン・シャムス (次注参照) にしかないという説は、『医学における薬物の書』や『医学典範』に基づく [al-Isṭahīrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 54; Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-ṭīb*, pp. 125–126; Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 265]。万能薬としてのバルサムに関する専論として、Marcus Milwright, “The balsam of Matariyya: an exploration of a medieval panacea” (*Bulletin of School of Oriental and African Studies*, 66-2, 2003, pp. 193-209) がある。仁子寿晴氏にご教示いただいた。記して謝意を表す。

9) カイロ近郊にある町で、アラビア語で「太陽の泉」を意味する。古代エジプトのヘリオポリス (ギリシア語で「太陽の町」の意) があった場所として知られる。宮廷管轄下にあるバルサム園があったことで知られる [EI<sup>2</sup>: ‘Ayn al-Shams]

10) バルマク家のジャアファル・ブン・ヤフヤーに帰される純度の高い金貨を指す [LN: Ja‘farī]。ジャアファルは、アッバース朝カリフのハールーン・アル＝ラシードによって造幣局長に任命され、さまざまな種類の硬貨を鑄造させた。なかにはハールーンや各地の支配者の名とともに、ジャアファル自身の名前が刻まれたものも存在する [EI<sup>2</sup>: al-Barāmika, Sikka]。

滴らせても火が点く。白い布地に垂らすと色がつく。ほんの少しばかりを羊毛に垂らし、火にかざす。燃やすときには2本の指を湿らせておき、それで〔羊毛を〕つかむ。もし途中で火が消えるならば、〔油は〕純正ではなく、すべて燃やし尽くして何も残らなかったならば純正な油である<sup>11)</sup>。

「球根 (al-baṣal)」は多種多様である。「セミの球根 (baṣal al-zīz)」は強い熱質である<sup>12)</sup>。「カイソウ (海葱) (baṣal al-‘unṣul)」も同様に強い熱質であるがまろやかである。また別の球根は「力ある竜涎香 (‘anbar al-quḍūr)」と呼ばれ、多くの益がある。タマネギ (piyāz) の頭を取り除き、その中を空にしてニンニクを1つ入れ込み、土の中に埋めると、「シャームの〔球根〕 ([baṣal-i] sāmi)」ができる。

#### <ター (al-tā’) の項>

「イチジク (al-‘īn)」、〔ペルシア語で〕「アンジール (anjūr)」は、祝福された果実である。〔ヌーフの〕大洪水の際に、イチジクの木を除いたあらゆる木々が死に絶えたと言われる。またどのような果実にもどこか捨てる場所があるが、イチジクにはない。至高なる真理者 (神) は『クルアーン』の中でイチジクについて、「イチジクとオリーブによって」[Q95: 1] と言及されている。イチジクの枝を燃やし、その煙が成人した男の睾丸に達すると、睾丸は活性化する。イチジクの葉は致死性の毒であるが、その葉から出る乳液は、ハチによる刺し傷を和らげる。イチジクの枝に絵を描くと、イチジク〔の実〕に同じ絵が現れる。実がすぐに落ちるようなイチジクの木には、根元にカイソウを植えると実がなったままになる。フルワーン<sup>13)</sup>産のイチジクはどのイチジクよりもすばらしい。〔イチジクは〕粘液を分解し、〔体内の〕ガスを抑える。

「リング (al-tuffāh)」は〔ペルシア語では〕「スイープ (sīb)」であり、効能ある果実で心臓を強くする。シャームには、割ると中にもう1つリングが入っているリングがある。シーラーズにあるリングの木は半分が酸っぱく、もう半分は甘い<sup>14)</sup>。動物たちはリングの木を好み、特に象は (p. 310) 林の中でリングの木のある場所に落ち着く。

#### 〔逸話〕

アリストテレスは死の間際に、「遺言を残したまえ」と乞われた<sup>15)</sup>。〔アリストテレスは〕言っ

11) 14世紀の架空のイギリス人旅行記『マンデヴィル卿の旅』の中に見えるバルサムについての言及の大意は次のとおりである。バルサムはカイロ近郊の野に生えており、他国では育ちはするものの実を結ばない。商売人や薬売りがさまざまな手で偽物のバルサムを作っては「バルサム」と称してこれを売り、多くの者が騙されている。純正のバルサムの特徴および偽物との見分け方は、透明な淡黄色で強い芳香を放つこと、掌に少量つけて太陽に当てると熱くなること、ナイフの先に少量つけて火に当てると燃えること、水に垂らして混ぜても濁らずに水の入った容器の底に沈むこと等である〔福井秀加・和田章監訳『マンデヴィルの旅』英宝社、1997年、43-45頁〕。

12) 「セミの球根」は、『医学における薬物の書』では、ユリ科の球根植物であるムスカリ (albūs) とされている〔Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-‘ibb*, pp. 124-125, 325〕。なおこの項目の baṣal と piyāz は前者がアラビア語、後者がペルシア語であるだけで同義であるが、文脈に応じて訳し分けている。

13) 本訳注 (4) 注 168 (『イスラーム世界研究』第4巻1-2号、2011年、513-514頁) にあるとおり、フルワーンという町はイラクとカイロ南部の2ヶ所にある。ここではイチジクの産地として知られた前者を指す。イラクのフルワーン産のイチジクはその質の良さゆえに、「イチジクの王 (sāh-i anjūr)」と呼ばれたという〔Yāqūt, *Muḥjam al-buldān*, vol. 2, pp. 290-291〕。

14) 『医学における薬物の書』に、イラン南部の主要都市であるシーラーズあるいはその近郊のイスタフルに、半分が甘く半分が酸っぱいリングがあるという記述が見られる〔Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-‘ibb*, p. 149〕。

15) 本書の著者に先立つ Rāgīb al-‘Iṣfahānī (1108/09年没) の『教養人たちの講義 (Muḥāḍarāt al-udabā)』に、アリストテレスが死の間際にリングを求めた、という記述があるが、遺言の中身については触れられていない〔al-Rāgīb al-‘Iṣfahānī, *Muḥāḍarāt al-udabā*, Manṣūrāt Dār Maktabat al-Ḥayāt, Beirut, n.d., vol. 2, p. 588〕。

た。「話す力が出ないから、リンゴを1つ焼いておくれ。」

リンゴが焼かれた。彼はそれを食べると、心臓に力が湧いてきた。[そしてこう] 言った。「いかなる女も決して信用してはならない。私はあらゆる気質を知り尽くしたが、女たちの気質や彼女らの不誠実さについてだけは理解できなかった。」

そしてこの世を去った。

サーミラには1本の木がある。2本の枝が伸び、それぞれから同じ味、同じ色のリンゴがなっている。一方は食べると眠りに落ち、腹を下す。もう一方は、食べると目が覚め、腹を詰まらせる。

マームーンは、「もし『形』あるリンゴが『形』をなくすと、それはまさに『喜び』となろう。またもし『喜び』が『形』をなすならば、それはまさにリンゴとなろう」と言った<sup>16)</sup>。

リンゴの色は目を楽しませ、その香りは生命を楽しませ、またその味は靈魂を楽しませる。

#### <ジーム (al-jīm) の項>

「クルミ (al-jawz)」はアジャムの木であり、大木の一種である。その油は解毒剤 (taryāq) になる<sup>17)</sup>。だが、クルミが生えていないような地域に持っていくと、それは致死性の毒となる。ある者が次のような話をした。「トゥルクスターンでは、テュルクたちの王が誰かを殺そうとすると、箱を1つ持ってこさせ、中からクルミを1つ取り上げ、砕いて仁を取り出した。そして敵に与えると、[敵は] 死んでしまうのであった。この男が王に、『私はクルミを [毒ではなく] 糧とする土地の生まれです』と言うと、王はその言葉に驚いていた。」

クルミを5日間、夢精をしたことがない少年の尿に浸け、その後 [そのクルミを] 植えると [新たに実った果実の] 皮は薄い。また、クルミ [の仁] を傷つけずに皮から取り出し、新鮮なブドウの葉で巻き、植えるならば、その皮は非常に薄くなる。壺の底を壊し [その中に] クルミをいっぱいに入れ、土の中に埋めて水をやると、それらのクルミは1つになり、1本の巨木となる。

私はハマダーン近郊でまっすぐに伸びたクルミの木を見たことがある。その枝々は [君主用の] 大天幕のように円を描き、そのうちの何本かは地面に届くほどに [垂れていた]。(p.311) 枝々は3層になっていた。1羽のカラスが [一番上の] 枝先で嘴からクルミを落とした。[そのクルミは] 1番目の層に至り、さらに下に落ちて次の層に達した。さらに下に落ち、別の枝の上に落ちた。この地方の人々は、「誰もこのような木は見たことがない」と言っていた。木の周囲には10もの庭園があり、すべて [この木の大きな枝の] 下にあった。

医者たちは、「クルミには解毒の薬油があるが、その搾りかすは毒である」と言う。夢にクルミを見るのは「困難な事態」を示す。というのも、クルミは砕かないと仁を取り出せないからである。また、「こいつはクルミよりも口の悪い野郎だ」と言われる<sup>18)</sup>。

「動く木片 (ḥaṣaba al-jawalān)」。「動く木片」は一種の枝であり、その特性は、貼ると頭痛 (ṣudā') を鎮め、飲むと衰弱 (diqq) に効果がある。「動く木片」は貴重であり、王たちの宝庫に秘

16) 『教養人たちの講義』に同様の記述があるが、「喜び (farah)」ではなく QZH (香料/虹などの意味がある) となっており意味をなさない [al-Rāḡib al-Iṣfahānī, *Muḥāḍarāt al-udabā*, vol. 2, p. 589]。

17) プリニウスは、クルミにイチジクやヘンルーダの葉を加えた解毒剤について記す [プリニウス著『プリニウス博物誌 植物薬劑編』大槻真一郎 (編)、八坂書房、1994年、231頁]

18) イラン出身のアラビア語文法学者ザマフシャリー (1074/75-1143/44年) の著作『修辞学の基礎 (*Asās al-balāḡa*)』にこの言い回しが記載されている [Muḥammad b. 'Umar al-Zamaḥṣarī, *Asās al-balāḡa*, Ed. Sh. al-Ma'rī, Maktabat Lubnān Nāṣirūn, Beirut, 1998, p. 119]。

蔵される。みなの手が届くわけではない。

<ハー (al-ḥā') の項>

「ポプラ (al-ḥawr)」はルームの木である。木から樹脂が流れ出し、固まると琥珀になる。その実は癩癩 (sarʿ) に効果がある。蜂蜜と混ぜて目に入れると、視力が増す<sup>19)</sup>。

「カルダモンの木 (šajara al-ḥamāmā)」は、枝はルビー色で、房は黄金色の木である。良い香りがし、人々を眠らせ、酔わせる。薬に調合すると肝臓に効果がある<sup>20)</sup>。

「コロシントウリの木 (šajara al-ḥanzal)」はアラブの地にある。薬にして用いる。種は黄胆汁を排出させるが、それを食べると腸を傷つけるので危険である<sup>21)</sup>。木に1つだけコロシントウリがなっていたら、それは致死性の毒である<sup>22)</sup>。コロシントウリを身につけると、ハイエナはその者から逃げていく。ところでハイエナの害はライオンの害よりもひどい。なぜならハイエナは人間と (p.312) [姦通] し、その後で [人間を] 食べてしまうからである。

<ハー (al-ḥā') の項>

「ヒース (ḥalanj)」とはたくさんの雑多な木々のことである。トゥルキスターンの草原では、ホラズムの町々まで一面にヒースの木が生えている。それは「慈悲の林 (Ḡayḍa al-raḥmān)」と呼ばれている。この林にはサイがいる。この木から盆や椀などが作られる。

「ハクヨウ (白楊) (ḥadang)」は大きな木である。ルースの地方にある。その樹皮は、槍の鞘の上に被せて用いられる。「印章つきのハクヨウ (ḥadang ba-muhr)」と呼ばれるものもあり、樹皮には模様があり、まるで中国の絵師が描いたかのようである。そのようなものは、[表面に] 紋様の浮き出る鋼と同じく高価である。ハクヨウは柔らかく扱いやすい木材であり、そこから矢を削り出す。この木の上にはタカが巣をかけ、その下にはテンが巣を作る。その樹皮からは鋳蠟のような樹脂が採れる。

<ダール (al-dāl) の項>

「プラタナス (al-dulb)」は [ペルシア語の] 「チェナール (čanār) の木」のことである。コウモリはその葉を恐れる<sup>23)</sup>。ハゲタカは自分の子や卵を食べるコウモリのことを恐れるので、プラタナスの葉を持ってきてそれで巣を作る。そうするとコウモリは近づかない。

19) 『医学典範』にはほぼ同様の内容が見られる [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 323]。なお、ローマ時代の植物学者ディオスコリデス (90年没) の『薬物誌』に、ポプラ (セイヨウハコヤナギ) の樹脂が次第に凝固して「琥珀 (クリュソホルム)」と呼ばれているものになる、という記述が見られる。また、同書やプリニウスの書に、黒ポプラの種子を酢と混ぜたものは癩癩に効くという記述がある [『ディオスコリデスの薬物誌』 鷲谷いづみ訳、エンタプライズ、1983年、62頁; 『プリニウス博物誌 植物薬剤編』、253-254頁]。

20) 『医学典範』にはほぼ同様の記述がある [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, pp. 313-314]。

21) プリニウスによると、コロシントウリは下剤として用いられており、浣腸剤として注入すると腸のあらゆる疾患を癒し、腎臓や腰の疾患、麻痺を癒すという。またディオスコリデスによると、コロシントウリは粘液、胆汁、ときには血液性物質を排出し、コロシントウリを用いた薬剤が体液や粘液を浄化するはたらきを持つものの、胃腸を痛めるとされる [『プリニウス博物誌 植物薬剤編』、6-7頁; 『ディオスコリデスの薬物誌』、701頁]。

22) この一文は『医学典範』に拠るのだろうか [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 317]。

23) プラタナスがコウモリ除けに使われていたことは、プリニウスの『博物誌』にも言及がある。古代ローマではプラタナスの葉を燃やし燻してコウモリの侵入を防いだ [『プリニウス博物誌 植物薬剤編』、224頁]。

「シャギーサーンの木 (dār-i šaġīṭān)」は大きな木であり<sup>24)</sup>、それには棘がある。ヒヤシンス (sunbul) はそこから採れる。熱質であり、潰瘍 (qurūh) や傷に効果があり、その実は練り薬に使われる。性欲を増大させる。

「ニレ (榆) (dardār)」は虫こぶ (kadū-hā) ができる木である。[虫こぶを] 開くと、中には液があり、蚊で埋め尽くされている。そこから流れ出すものを採取して傷に塗ると良くなる<sup>25)</sup>。絵師たちはその液で金箔を貼る。非常に上品なものである。

(p. 313) 「ディーヴの木 (ヒマラヤスギ) (dīw-dār)」は [別名] 「ヒンドのモミ (šanawbar-i hindī)」である。その乳液は熱質であり、神経に効く。半身麻痺や顔面麻痺に有益である。膀胱の中の石を砕き、尿とともに外に出して人を助ける<sup>26)</sup>。

「ダムクース (DMQWS)」はミスルの木である。夜になると、遠くで火のように輝き、旅人はそれに騙されてそこを目指す。近づくと木とわかるが、離れると火に見える。

「ダンス (DNS)」は麻の一種である。ミスルでは船のための綱をそれから編む。その1本をきつく搓っていくと火が点き、一晩中燃える。

<ラー (al-rā') の項>

「ザクロ (al-rummān)」は [ペルシア語の] 「アナル (anār)」のことである。有益で祝福された果実である。創造主は、[ザクロを] メノウのように宝石箱の形をし、その中の種はルビーのように、あいだにある黄色の膜は絹織物のようにお創りになった。黄胆汁を抑え、心臓に効く。コウモリはザクロにとって天敵である。その中に [洞をこしらえ] 子供を運び入れ、巣を作るからである。ザクロの棒で人を叩くと死んでしまう。甘い実のなるザクロの木の根元をわずかに開いて酢を流し込むと、ザクロは酸っぱくなる。また酸っぱいザクロの木の根元を開いて蜂蜜を流し込むと、ザクロは甘くなる。こういったことがザクロの特性である。

「ダイオウ (大黃) (rāwand)」は [別名] 「ヒンドのヒョウタン (kadū-yi hindī)」である<sup>27)</sup>。その葉は「ヒンドの肉桂 (sādaj-i hindī)」と呼ばれる。「中国のダイオウ (rāwand-i čīnī)」と言う人々

24) 「シーシェアーン (šīš'ān)」とも記される。アラビア語で「樹木」を意味する dār とヤマモモ類を指す šīš'ān からなる合成語。『医学における薬物の書』や『医学典範』では、これがギリシアの植物誌に見えるマメ科のアスパラトス (aspalathus) のことであるという説、インドのヒヤシンス (sunbul al-hindī)、またはその根であるという説が挙げられている [Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-ṭibb*, p. 261; Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 290]。

25) 『医学典範』やプリニウスによると、ニレの虫こぶの中に生じる液は、皮膚につやを与えて顔を美しくするという [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 293; 『プリニウス博物誌 植物薬劑編』、254 頁]。

26) 『医学典範』にはほぼ同じ記述が見られる。また、麻痺に効くという薬効は、『薬用植物の書』にも挙げられている [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 293; Muwaffaq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, p. 157]。

27) “rīwand” や “rībās” とも表記され、ルバーブ／ダイオウの一種とされる。アラビア文字による転写はさまざまである。漢方医学では古くから知られる最も重要な生薬のひとつであり、主に根茎を用いる。



もいる<sup>28)</sup>。「ダイオウ (rāwand) はルバーブ (rībās) の根である」とも言われる<sup>29)</sup>。ルバーブは有益な果実であり、黄胆汁を抑制する。トゥースの境域では、ルバーブ1つが50マン [の重さ] にもなる。疫病に効果がある。「中国のダイオウ」はテュルクのものよりも良く、燃焼して肝臓に効く<sup>30)</sup>。

#### <ザー (al-zā') の項>

「オリーブ (al-zaytūn)」は祝福された木であり、有益で、熱質であり、まろやかでバランスがとれている。創造主は (p.314) オリーブを称賛された。それにはすばらしいほどの益がある。腸閉塞 (ilā'us) は、腸道が閉じることからくる腹痛のことであり、何を食べても吐き戻してしまいが、オリーブ油はこの病因を開いて [治す]。かりに死者が薬で生き返るとするならば、その薬とはオリーブのことであろう。

#### [逸話]

ある人が難しい病気に侵され、行き詰って治療をあきらめた。ある夜、彼は夢の中で『ラーワラー (LAWLA)』を使え」と言われたが、「ラーワラー」が何のことなのか誰もわからなかった。1人の学識者が察して言った。「創造主は『東方 (の産) でもなく西方 (の産) でもないオリーブ (zaytūn, lā šarqīya wa lā ġarbiya)』 [Q24: 35] とおっしゃっている。この『ラー・ワ・ラー (lā wa lā)』とはオリーブのことだ」と。[病人が] オリーブを食べると、その病から救われた。

「オリーブの聖堂」については既に述べた<sup>31)</sup>。

知れ。世界中でオリーブの木ほど長寿の木はない。[オリーブは] 寿命が長い。「シヤームにあるオリーブの木は3000年以上前に植えられた」と言われている<sup>32)</sup>。それはルーム人より前のギリシア人がいた頃のことである。

オリーブの樹脂は「アスタラク (aṣṭarak)」と呼ばれ<sup>33)</sup>、その煙は、乳香 (kundur) の煙のようである。人を眠りにつかせ、頭を重くする。痔に効き、利尿作用がある。オリーブ油に浸したパンをネズミが食べると死んでしまう。というのも、オリーブは祝福されたものであるが、ネズミは不吉なものだからである。種はいずれも植えると同じものが生えてくるが、オリーブはそうではない。その種からは、オリーブとは別のものが生えてくる。種ではなく、若木を植える [とオリーブの木になる]。

28) 『薬用植物の書』によると、ダイオウ (rāwand) には中国産とホラーサーン産があるという。また、『医学における薬物の書』のペルシア語訳 (13世紀成立) では、ダイオウの種類として、チーン (中国) 産、ヒターイ産、カシュミール産、ジョルジャー産が挙げられている [Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-ṭibb*, pp. 299–300; Muwaffāq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, pp. 165–166]。

29) rāwand も rībās もダイオウのことであるが、原文では書き分けがされているため、ここでは前者を「ダイオウ」、後者を「ルバーブ」とする。『薬用植物の書』や『医学典範』、『医学における薬物の書』では別々に立項されているが、両者の関係については特に言及されていない [Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-ṭibb*, pp. 299–301; Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, pp. 429, 432; Muwaffāq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, pp. 163–164, 165–166]。

30) 『薬用植物の書』によると、「ルバーブ (rībās) は胃と肝臓を強壮にし、冷質であり、熱質を壊すとされている。一方、「ダイオウ (rīwand) は熱質かつ乾質である [Muwaffāq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, pp. 163, 166]。

31) 「オリーブの聖堂」については、本訳注 (5) (『イスラーム世界研究』第5巻 1-2号、374–375頁) を参照のこと。

32) 『医学における薬物の書』に、パレスチナのオリーブの木は3000年前からあるという記述が見られる [Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-ṭibb*, p. 324]。

33) 黒味がかった赤いゴムで、カタル (nazla) に効く [LN: Aṣṭarak]。『医学における薬物の書』や『医学典範』でも「アスタラクとはオリーブの樹脂である」という記述が見られる [Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-ṭibb*, p. 322; Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 251]。

「ザックーム (zaqqūm)」は荒野に生える木である<sup>34)</sup>。その樹脂は「スカモニヤ (saqmūniyā)」と呼ばれ<sup>35)</sup>、胃を悪くし、食欲を減退させ、死に至らしめる。少量を薬に調合すると、黄胆汁を排出する。それを中和するのは、アロエ (ṣabr)、カティラー樹脂 (katīrā)<sup>36)</sup>、マスティック樹脂 (maṣṭakī) である。心臓を苦しめる。心臓の敵である。血管を開き、虚弱をもたらす。

「サンザシ (山査子) (za'rūr)」は〔山岳地帯の〕コヘスターンでは「山のもの (jabalī)」と呼ばれる。冬に実がなる。実は光沢のある赤色で、2つの核が入っている。雪が降らない限り熟さない。果実はいずれも太陽で熟すが、これは寒さでもって完熟する。

(p.315) <スイーン (al-sīn) の項>

「タマラニッケイ (タマラ肉桂) (sādaj)」は水の中に生え、水面に立つ。何ともつながらない〔浮き草で〕、ヒンドウスターンの海中を漂っている<sup>37)</sup>。その特性は肝臓に有益で、衣服を害虫から守り、口のおいを良くする<sup>38)</sup>。

「ユリ (sūsan)」は熱質であり、その油は〔体内の〕ガスを分解する。眠っている人の足の下に置くと、一晩中寝言を言う。

「マルメロ (safarjal)」は美味な果実であり、快活にし、活力を与える。心臓を強くし、便を詰まらせるが、その種は便通を促進する。すなわち、その実自体は便通を悪くするのだが、種には促進作用があるのである<sup>39)</sup>。トゥースの境域では、どのマルメロも1つ150ディルハムの重さがある。

「スーマック (sumāq)」は便を詰まらせ、黄胆汁を抑える実をつける<sup>40)</sup>。乾質であり、手に取ると、腹がふさがり〔便が詰まる〕ほどである。

「チーク (sāj)」はこの上なく大きな木である。クーラムの町<sup>41)</sup>に生え、その高さは100アラシュにもなる。その削りかすは水に沈む。チークは若木のときはまっすぐに立っているが、成木になると背中を曲げ、老いると頭を垂れる。幹には節 (gira) が1つも無い。ヒンドの人々はその葉

34) 『クルアーン』37章62節および44章43節において、「地獄の底に生える木」「罪ある者の糧」として言及される [EI<sup>2</sup>: Zakkūm]。

35) テキストでは ZQMWNYA となっているが、lā 写本等に従う。ディオスコリデスによれば、ヒルガオ科セイヨウヒルガオ属の植物、およびその根を切断して採取される液汁のことを指し、胆汁や粘液を排出する葉や下剤として用いられたという。『医学典範』や『薬用植物の書』でもヒルガオ (lablāb) の液汁を指すという説が紹介され、本文と同様の薬効が記されている [『ディオスコリデスの博物誌』、694頁; Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 385; Muwaffāq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, p. 190]。

36) これはマメ科ゲンゲ属の植物から採れる樹脂である。聖書では、トラガカントゴムと訳される。

37) 『医学における薬物の書』に、「タマラニッケイはヒンドの地の守られた場所に生え、水面に出てくる。浮き草のようで根はない」という記述が見られる [Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-ṭibb*, p. 326]。

38) 『医学典範』や『薬用植物の書』にはほぼ同様の描写、および薬効の記述が見られる [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 380; Muwaffāq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, p. 193]。

39) 『医学典範』参照。なお、『薬用植物の書』では、「食前に食べると便を詰まらせ、食後に食べると便通を良くする」とされる [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 394; Muwaffāq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, p. 180]。

40) ウルシ科の灌木。小さな赤い果実は乾燥させてスパイスとして利用される。『医学典範』『薬用植物の書』参照 [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 387; Muwaffāq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, p. 192]。

41) クーラムはインド南部のクイロンのこと。ヒンドの人々がチークの葉でスポンを作ることは本書第4部のクーラムの項に既出 [本訳注 (5)、456頁]。

でズボンを縫い上げる。ダマスクスには「蛙の宮殿 (Sarā-yi taylūn)」の門のところには1本の糸杉 (sarw)<sup>42)</sup>があり、その高さは300アラシュで、その木陰には500人が座ることができる、と言われている。

「アカシア (sant)」はミスルにある木で、1000マンものその枝を燃やしたとしても、わずか手のひら分の灰にしかない。

<シーン (al-šim) の項>

「ツゲ (柘植) (šimšād)」は美しい木であり、まっすぐで美しい立ち姿をしている。(p.316) 耐水性があり、この木からは櫛が作られる。堅さにおいても、しなやかさにおいても、まっすぐさにおいても、かわりとなるような木は存在しない。

「ヒナゲシ (šaḡāyiq)」はきわだって赤い花であり、庭園を燃やすかのようなのである。どの花の液も蒸留瓶や蒸留器を使って精留すると白い液になるが、ヒナゲシのみは異なり、赤い液になる。これは驚くべきことである。というのも、血液でさえも蒸留瓶で精留すると白くなるからである。ヒナゲシの油は髪の毛を〔黒く〕する<sup>43)</sup>。

「カブ (蕪) (šaljām)」の特性とは目に視力を与えることである。生のまま食べても、調理して食べても〔その効果は変わらない〕<sup>44)</sup>。キャベツ (kurunb) の種とカブ (šalgām) の種を古くなってから蒔くと、カブの種からキャベツが生え、キャベツの種からカブが生える<sup>45)</sup>。大釜の半分まで糞を入れ、底を壊し、地中に埋める。そして種をその中に入れて堆肥を種の上にかけて、大釜の大きさに応じたカブができる。ほかのもろもろの種も同様である。

<サード (al-šād) の項>

「ビヤクダン (白檀) (šandal)」はマンドゥールキーン (MNDWRQYN)<sup>46)</sup>の町に生えている。ヒンドの林には1本の大きな〔白檀の〕木があるが、蛇がその下で眠っているため、そこにたどり着くのは困難である。白檀は冷質であるが、よく磨くと熱質になる。

「モミ (樅) (šanawbar)」は背の高い木である。冬も夏も緑豊かである。寒さで木が枯れることはない。高温の熱でその種を練り薬にすると、性交の際の強壯剤となる。その中には致死性の毒をもつ虫がおり、〔その毒の〕力はハンミョウ (darārīh) に匹敵する。

<ター (al-tā') の項>

42) チークの間違いだと思われるが、本章では「糸杉 (sarw)」の項目がないため、同じ「スイーンの項」に入る「糸杉」の項目が欠落しているのかもしれない。

43) テキストでは sipīd (白) となっているが、サーデギー校訂本に従い、siyāh (黒) と読む。『薬用植物の書』でも同様 [Muwaffāq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, p. 201]。

44) 『医学典範』参照 [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 439]。

45) 『医学における薬物の書』に、「4年経ったキャベツの種を蒔くとカブになり、そのカブの種を蒔くとキャベツになる」という記述が見られる [Bīrūnī, *Kitāb al-saydana fī al-ṭibb*, p. 529]。

46) インド南部、あるいはインド南東部にある地名。本訳注第4部の注499を参照 [本訳注 (5)、456頁]。

「タバール (tabāšīr)」はマンドゥールキーンにある<sup>47)</sup>。それは長い葦 (qaṣab-hā-yi dirāz) である。藪に風が起こり、(p.317) 互いに激しく擦れ合うと、火が点いて焼けてしまう。その火事でタバールができる。葦の内部から採れるものがより上質である。毎年ごくわずかししか採れず、金に匹敵する値打ちがある。場合によっては、その葦が何ファルサングも燃えてできることもある。葦 (qalam) の内部にあるものが良く、喉の渇きを抑え、心臓を強くし、腹の血を止める。まことにアッラーは最もよく知りたまう。

「シナモン (tārsīnī)」は祝福された薬であり、[アラビア語で]「キルファ (qirfā)」と呼ばれる<sup>48)</sup>。人の顔を美しくし、目の光を増加させ[視力を増す]。鳥や獣が好むほどにすばらしい薬であり、鳥たちはそれで巣を作る。「ある鳥はトゥルクスターンからヒンドにやって来て、それを掴んでトゥルクスターンに運び、それで巣を作る」と言われている。それは「アギーニールス (AGYNYLWS)」と呼ばれる。

「タルスース (tartūt)」は、樹脂が「ウシヤク樹脂 (uṣāq)」になる木である<sup>49)</sup>。ウシヤク樹脂は有益な薬であり、熱質で、第2級である。便通を良くし、傷を治し、肉を再生する。その飲み薬は血が流れ出るほどに尿を通らせる。[体内の] 寄生虫 (ḥabb al-qar‘) を外に出し、赤子を流産させる。また、それをういて金 (箔) を紙に貼りつける。

「ギョリュウ (檉柳) (tarfā)」は木である。サバーの人々が背いたとき、創造主は彼らにお怒りになった。火が彼らの庭を焼きつくし、かわりにギョリュウが生えた<sup>50)</sup>。それが生きものに触れると、生きものは病気になる。

次のように言われている。アフガンの人々の境域にはギョリュウの地 (gazāstān) がある。そこには17アラシュの太さの木が1本あり、その木の枝を折る者は、一昼夜、手が痛み続ける。アフガンの人々はその木に跪拜し、それを「ブラフマンの木 (dirāht-i Barahman)」と呼んでいる。その林にはライオンやトラがいるが、この木の下に来た者は猛獣から守られる。

ギョリュウは創造主のお怒りが達したような荒れ果てた土地に生える。

(p.318) <アイン (al-‘ayn) の項>

「沈香 (al-‘ūd)」にはいくつかの種類がある。赤道の向こう側の島々にあるが、誰もそこに行っ

47) タバールは「ヒンドの葦 (nay-i hindī) (すなわち「竹」のこと) の内部から採れる薬、あるいは竹の根の灰のこととされ、『医学典範』によると、暴風によって竹が互いに擦れ合うことで火が起こり、その結果生じる燃えた竹の根 (uṣūl al-qinā‘) とされている。インドのムルシダーバードやベンガル地方に生える葦 (nay) の一種から採れる根茎であり、灰になるまで焼くことによって採取される [LN: Tabāšīr; Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-ṭibb*, p. 402; Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 326; Muwaffāq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, p. 220]。

48) シナモンはペルシア語では dārċīn (原義は「中国の木」と呼ばれる。ビールニーはアラビア語でのシナモンの別称に dāršīnī を挙げているので、ここに挙がる tārsīnī はそのバリエーションであろう [Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-ṭibb*, p. 484]。

49) ペルシア語ではビル (bil) と呼ばれ、甘い実を付ける。シノモリウム属の寄生植物の一種で、地中海や中央アジアに分布し、薬として重宝された。『医学典範』では、「ウシヤク樹脂」は「タルスースの樹脂 (ṣamaḡ al-tartūt)」のこととされており、金箔を紙に貼り付ける際に用いられるため、「金の接着剤 (lizāq al-qahab)」とも呼ばれたという。以下の薬効については、『薬用植物の書』の「ウシヤク樹脂 (uṣāq)」を参照 [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 252; Muwaffāq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, p. 35]。

50) 『クルアーン』34章16節の「だがかれらは背き去った。それでわれは、かれらに洪水を送り、かの2つの園を、柳と僅かばかりのハマナツメの苦い実を結ぶ園に変えた」という部分は、このサバーの庭園のことを指す。サバーの庭園については、本書第4部において、「焼かれた双庭園」という項が立てられている [本訳注 (5)、482-483頁]。

たことはなく、沈香の木がどのようなもので、その実がどれなのか見たことはない。[また別の]沈香は北の方角の「見知らぬ土地」から水に運ばれてくる。水が運んでくる沈香は「湿った沈香 (‘ūd al-raṭb)」と呼ばれ、決して乾かない。乾燥しているものはカラフやカーマルーンの町のものである。最も良質なものはマンダル (Mandal) 産のものである<sup>51)</sup>。[沈香は] 水に落としても沈まず、火にかけると溶ける。練り葉の中に入れると心臓を強くする。沈香の匂いは害虫から衣服を守る。その匂いは知力と記憶力を増す。

「竜涎香 (al-‘anbar)」は水中の木から採れる樹脂である。ある者は「海の底に泉があり、湧き出して [竜涎香を] 海面に押し上げるのだ」と言い、ある者は「それは海の牛の糞である」と言う<sup>52)</sup>。もしそれが動物の糞であるならば、麝香囊 (nāfa-yi musk) が血液性のものであることの説明がつくであろうし、また樹脂だと言うのであれば、粘着性であることの説明がつく。

鳥や猛獣が嘴やかぎ爪でそれをつつくと、必ずやその中に [ひつついて] 残ってしまう。そのため、竜涎香の中には嘴やかぎ爪がたくさん含まれている<sup>53)</sup>。「クジラ (bāl)」と呼ばれる魚がおり、その長さは200アラシュにもなるが、ごくわずかであれ竜涎香を食べると死んでしまう。竜涎香は心臓に効き、生命力を増す。死に際して死人の鼻にこすりつけると、[死人は] 笑う。飲むと、肝臓や胃や心臓や脳髓を強くする。

「ビヤクシン (柏楨) (al-‘ar‘ar)」は [横に] 大きく広がる木であり、[背丈は] 高くならない。その実は「アブハル (abhal)」になる。クルミほどの大きさで、熱質である。食べると尿に血が生じたり、流産したりする<sup>54)</sup>。[ビヤクシンの] 実を酢で煮立て耳に入れると、聾が治る。

「ナツメ (al-‘unnāb)」は立派な木であり、葉は光輝いている。その実は有益で、(p.319) 果汁は血をきれいにし、熱と湿り気をもたらず。体を太らせ、四肢を柔らかくする。賢人たちは「[ナツメを] 掌に握ると、血がきれいになる」と言っている。

#### [逸話]

1人のカーディーが次のように尋ねられた。「私は1頭の牛を殺したのですが、その血は水のように白かったのです。どうしてでしょうか？」

カーディーは言った。「あなたの牛はナツメを食べたのではなからうか。」

その男は帰って行った。次の日に別の男がやってきて、先の男を呼び出して言った。「この男には1頭の牛がいましたが、それは私の家にやってきて、10マンものナツメを食べました。私は今

51) カラフはカラーフバルとも呼ばれたマレー半島の交易港である。カーマルーンはインドの地名であり、沈香の産地として有名であった [本訳注 (4)、492、496頁]。マンダルもインドの地名であるが、どこを指しているかには諸説ある。『医学典範』では、マンダル産の沈香が最も良いとされるが、『薬用植物の書』では、最も良い沈香はヒンド産であり、次いでカマル産が良いとされている [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 398; Muwaffāq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, p. 228]。

52) 竜涎香はマッコウクジラの腸内にできた結石を乾燥させたものである。マッコウクジラはイカを常食とするため、「イカのくちばし」と呼ばれる角質が体内に蓄積し、結石となって体外に排出される。この結石は海上に浮遊したり、海浜に打ち上げられたり、捕獲されたクジラの体内から取り出されることもあった [[アンバークリス] 『日本大百科全書』小学館、1984-94]。アラブ人が伝える竜涎香の成因に関する話は、海水および海底のあるものから出来るという説、海中動物の排泄物であるという説、牛糞、鳥糞、蜜蝋などが漂流したものであるという説の三系統に分類できるといふ [山田憲太郎『香料博物事典』同朋社、1979年、450-453頁]。

53) 上質の竜涎香を砕くと、イカやタコのくちばしが体内にあるのと同じ状態のまま残っているとされる [山田『香料博物事典』、442頁]。

54) 『医学典範』に同様の薬効が記される [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 249]。

ここでその賠償を求めます。」

カーディーは「私の言ったことは正しかった」と言った。

この話はずまり、ナツメは血液を浄化するということであり、その自生地でない町々では、ナツメはある種の安らぎをもたらすということである。

「ブドウ (al-'inab)」。ブドウ (angūr) は高貴な果実である。シロップ (dūs-ab) はそこから作られ、それを用いて多くの甘菓子が作られる。ほかの果実に勝るさまざまな特性がある。スフラワード (Suhraward)<sup>55)</sup> には1本のブドウの木があり、ある年はブドウがなり、ある年は貝がなった。

ブドウは満月のときに植えなければならない。枝の先でも根元でもなく、真ん中からであり、[この挿し木の] 両端を牛糞で覆わねばならない。少量のパン用香料の粒 (nān-ḥwāh) を根元に蒔く。挿し木のあいだには必ずヒヨコマメ (nuḥwud) やキャベツを植える。[挿し木は] 地面から2アラシュ下に植え込む。もし枝が裂けてしまうなら、樹皮が剥がれないようにし、中にある羊毛状の毛を取り除く。そして集めてまっすぐに置き、薄いヤナギ (bīd) の皮で縛り、生長するまで置いておく。このようなブドウの木には種がない。

ヒンドウスターンには下剤となるブドウがある。[それを作る] 方法は次のとおりである。農夫はブドウの枝を折り、その中にスカモニア樹脂を入れ、縛ってから植える。[すると] そのブドウは下痢を引き起こす。

知れ。ブドウは各地で [それぞれ異なる] 形をしている。ザビード (Zabīd)<sup>56)</sup> では、1つの房が羊ほどの大きさのブドウがある。ある人が言うところによると、「2人の人物が1本の棒を肩に載せ、たったひと房のブドウを運んでいるのを私は見たことがある」とのことである。(p. 320) 聖なる家 (イェルサレム) には1粒が15 ミスカールのブドウがあり、[それは] ひと房が1 ハルヴァールにもなる<sup>57)</sup>。ハールーン・アル＝ラシードがマッカ巡礼に出かけていたとき、彼のもとには、ひと房のブドウがラクダに載せられ贈り物として届けられた。またサヌアーには「封印されたもの (muḥattam)」と呼ばれるブドウがある。「変わり者 (hūṣī)」と呼ばれる別の品種もあり、それは房が長いブドウである。別の品種は「乙女の指 (aṭrāf al-'aḍārā)」と呼ばれ、粒が細長い。ある品種のものは「牛の瞳 ('uyūn al-baqar)」と呼ばれ、粒が大きい。「水車 (dawāli)」と呼ばれるものは、1つの房が裸になったザンジウの男ほどもあり、1粒 [食べるのに] 何度も口に運ばなければならない。

#### <ガイン (al-gayn) の項>

「グミ (al-ḡubayrā)」は [ペルシア語の] 「センジェド (sinjid)」のことであり、山地の木である。その実には便を詰まらせる性質がある。腹の出血を止め、心臓を強くする。この花の匂いは女たちを欲情させる。グミの花を身につけた男のもとに女がやって来てその匂いに気づくと、たとえ年老いていてもまた若くても、彼女の理性は失われ、彼の言いなりになる。グミの花を女の体に擦り込むと、どこにいようと その女は発情してしまう。ヤナギの花と葉は [グミの] そういった働きを抑制する。

55) イラン中西部の山岳地帯であるジバル地方にあった町。モンゴルの侵攻時に破壊され、正確な場所は不明である [EI<sup>2</sup>: Suhraward]。

56) イエメンのティハーマ地方の中心都市。

57) 15 ミスカールは約 70 グラムで、14 世紀以前のイランでの 1 ハルヴァールは約 83 キログラム。

<ファー (al-fā') の項>

「コショウ (filfil)」の木は大きく、水がその下から引くことはない。人はコショウの木の上に登ることはできず、風がコショウを吹き落とすと、[コショウは] 水の中に落ちる。そこで [人々はコショウを] 集めて煮つめる。それには痺れさせる性質がある。他の場所に植えられたり生えたりしないよう、それゆえ煮つめられるのである。コショウは夏にも冬にも房状の実をつける。太陽が熱くなると、房が焼けてしまわないように葉が覆いかぶさり、太陽が沈むと葉が開く。コショウの木は高尚であり、何者によっても支配されない。白いコショウは火にかけても燃えることはない。熱質で、[体内の] ガスを分解し、内臓を強化し、欲情を掻き立て、癲癇、麻痺、顔面麻痺、手足の痺れに効く薬である。

(p. 321) 「ピスタチオ (fustuq)」は優美な種子であり、良い香りがする。種の中で、その優美さに匹敵するものはない。腐敗は遅く [ほとんど腐らない]。クルミヤゴマ (simsim) の核果は短期間で腐ってしまうが、ピスタチオはより長く保つ。その特性はまろやかで熱質である。内部に芳香があるために、活力を増進する。この木の幹に穴を開けると、マスティック樹脂が流れ出す。マスティックは胃を強くし、頭をすっきりさせる。

<カーフ (al-qāf) の項>

「ヒョウタン (al-qar')」は [ペルシア語の] 「キヤドゥー (kadū)」のことである。弱々しい木であるが、大きな実がなる。病人に効果があり、その木陰は病人を楽にする。ユースス——彼に平安あれ——の頭上の木陰であった<sup>58)</sup>。ヒョウタンとマクワウリ (ḥarbuza) は同じ場所に生える。ホラーサーンには、ラクダ1頭かけて1個を運ぶほどのマクワウリがある。[また] モースルには「ターウーリー (TA'WRY)」と呼ばれる品種があり、ムッタデイドはその種をバグダードに持ってきて蒔いたが、うまく育たなかった。人々は「気候のせいでしょう」と言い、彼は「気候に対しては我々は打つ手がない」と言った。

「ナデシコ (al-qaranful)」はザンジバルに生える。誰もそれが生えている場所を見たことがない。商人たちはディルハム銀貨を岸辺に置き、立ち去る。翌日再び戻ってみると、銀貨のあった場所にナデシコが置かれており、金は持ち去られている。ナデシコは祝福された薬であり、つんとする匂いや香りがある。精神を和ませる。薬に加えると、手足の力を増進する。

「キュウリ (al-qitā')」は [ペルシア語では] 「ヒヤール (ḥiyār)」である。それを長く伸ばそうと思うならば、水を満たした椀をその前に置いておく。すると、[キュウリが] 水を感じ、水の方へ伸びてくる。またそれは乾きを感じると短くなる。キュウリの種をスカモニア樹脂につけてから蒔くと、腹を下す [働きを持つ実がなる]。キュウリの種は冷質かつ湿質である。腎臓の痛みを鎮め、膀胱を清める<sup>59)</sup>。

58) この記述は、『クルアーン』37章146節「われはかれ(ユースス)の上に、1本のヒサゴの木 (Sajarat min yaqīn) を繁らせ(影を作った)」に基づいたものであろう。「1本のヒサゴの木」が指す植物については諸説あるが、タバリーのクルアーン注釈書には、これを「ヒョウタン (al-qar')」とする解釈が紹介されている [Ṭabarī, *Tafsīr al-Ṭabarī*, Damascus, Beirut, 1997, vol. 6, pp. 372–374]。

59) 『薬用植物の書』に同様の記載がある [Muwaffaq al-Dīn al-Harawī, *al-Abniya*, p. 250]。

<カーフ (al-kāf) の項>

「ヨウナシ (洋梨) (al-kummaṭrā)」は [ペルシア語の] 「アンバルード (anbarūd)」のことである。優美な果実であり、心臓に効く。(p. 322) ヨウナシが豊作の年はいつも他の果実は出来が悪い。マフラ<sup>60)</sup>の境域には1本のヨウナシの木があり、冬でも夏でもいつも実をつけている。誰でもそこから1個 [であれば] 取って食べることができる。その木は、預言者フード——彼に平安あれ——が植えたものだとされている。ヨウナシはたくさん食べると腹痛を起こす。「アッバースもの (‘abbāsī)」は心臓に効く。

「ケッパ (al-kabar)」は祝福された薬であり、消化を助け、肥大した脾臓を小さくする<sup>61)</sup>。

アンマール・ブン・ティヤーフ (‘Ammār b. TYAH) は次のように言う<sup>62)</sup>。「私はルームの王のもとへ行つた。すると王はさまざまな財宝を見せてくれた。[王は] 鍵のかかった箱を1つ開け、そこからギョリュウの枝を1本取り出した。私は、『この木はサバーの民にかかわる不吉なものですから<sup>63)</sup>、我々の町では燃やしてしまいます』と言った。[すると王は] 『我々の国では、これの煙は病人に効くのだ』と言った。王はさらに黄金の箱を1つ持ってきて、数粒のケッパの実を取り出し、言った。『我々の国ではこれを重宝している。いろいろな薬に入れて用いることができるのだから。だがケッパは荒廃した土地に生えるものだ。』」

「樟腦 (al-kāfir)」の木はハルカンドの島<sup>64)</sup>にあり、大きな木である。トラがそこをめぐらしているの、行きつくのは困難である。樹脂が樟腦となる木を見分けられるのは、タカとハトを除いてほかにはいない。なぜなら彼らは暑さが厳しくなると、その木に身を寄せるからである。そして翼を広げ、涼を求めて胸をその木に押し当てる。猟師は目印としてその木に向かって矢を放つ。やがて冬になり、猛獣がそこを去ると [猟師は] 再びやって来て、その木から樹脂を採りだす。その方法は次のとおりである。木に矢で穴を開け、そこから樹脂が流れ出るようにする。

樟腦はマンドゥールキーンの町の海辺にある。私が聞いた話では、夏、蛇は暑さを恐れ、樟腦の冷たさを得ようとその枝に巻きつき、冬には引き返すという。

「キシマル (kišmar)」は背の高い木であり、太さは40アラシユもある。それはグシュタースプ (Guštāsf)<sup>65)</sup>が拝火殿の前に植えたものである<sup>66)</sup>。彼は、「創造主はキシマルを私にお与えに

60) アラビア半島に居住していた部族名 [本訳注 (5)、465頁]。なおこの地名については、la 写本の「マルヴ」の可能性もある。

61) 『医学典範』参照 [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol. 1, p. 344]。

62) 『医学における薬物の書』では、アッバース朝カリフ・マンスールによってルーム王 (qaysar) のもとに派遣された使者として、‘Ammār b. Hamza という人物の名前が挙げられている。ルーム王がケッパを見せて会話を交わす点も同様だが、会話の内容は若干異なり、アンマールが「ケッパはムスリムのもとに多くある」と言ったのに対し、ルーム王は、「ケッパは荒れた土地に生えるので、ムスリムの土地は荒れている」と返している [Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-ḡibb*, p. 58]。本項目の最後の一文は、校訂テキストでは王の発話の外に置かれているが、ここでは典拠となったであろうビールーニーに従い、上記のように訳す。

63) サバーの民については、本訳注 (5)、482-483頁および本章の「ギョリュウ」の項を参照。

64) ベンガル湾を指すとされるハルカンドの海については、本訳注 (4)、497頁参照。

65) イランの伝説的な王朝カヤーン朝の王。ゾロアスターを庇護して、その布教を助けたとされており、『アヴェスター』にも登場する。サーサーン朝期には理想的な王とみなされ、やがて王家の祖先のひとりに位置づけられるようになった [Elr: Goštāsp]。

66) テキストは KŠMN だが、「キシマル」と読む。バルティア人の伝承によれば、グシュタースプはレーヴァンド山にある「ブルゼン・ミフルの火 (Ādur Burzēn-Mihr)」の前に「キシマルの糸杉」を植えたという。一方、



なった」と世界中に伝え、黄金の宮殿を建設し、ジャムシードやアーファリードゥーンの像をそこに設置し、鉄の城壁を造った。(p.323) それは「キシマルの糸杉 (sarw)」と呼ばれている。この知らせがトゥルクスタンに届くと、アルジャースプ (Arjāsf) 王<sup>67)</sup> は、「おまえは破滅への信仰を手にしたが、[その上] 預言者だと主張するのか」と彼に書き送った。両者の間に数々の戦争が起こったが、キシマルは、公正なるヌーシラヴァーンの時代に、彼がそれを打ち壊すまで残っていた<sup>68)</sup>。

#### <ラーム (al-lām) の項>

「アーモンド (al-lawz)」は [ペルシア語では] 「バーダーム (bādām)」である。祝福された果実で、吉兆とみなされている。テュルクの地で珍重されており、王が娘を嫁に出すとき、3粒か4粒のアーモンドを黄金の小箱に入れ、持参の家財とともに運ぶほどである。[アーモンドを] すり潰し、黄金の棒で目に入れると、さまざまな効果がある。たとえばほとんど盲目になってしまっても [効く]。仁を傷つけないようにアーモンドを砕き、殻を取り除いて蒔くと、その実の皮 (殻) は薄く、「手で割れるクルミ (jawz-i dast-šikan)」と同じように、手で割れる。これは大変驚くべき発想である。

「ルービヤ豆 (lūbiyā)」<sup>69)</sup> の木は海中に生え、背が高い。人はその上に登ることはできない。そこで、サルが下に持ってきたものをサルから奪う。もしサルが下へ持ってこなければ、誰もルービヤ豆を手に入れることはなかったであろう。種は半分が赤く、半分が黒く、きらきらとした色をしており、驚くべきものである。

#### <ミーム (al-mīm) の項>

「封印された [ブドウ] (muḥattam)」はサヌアーの町にあるブドウの一種で、房が大きく非常に甘い<sup>70)</sup>。

ブドウは祝福された果実であり、創造主はそれを贈り物としてアードムに授けた。イブリースは嫉妬に駆られ、アードムから [ブドウを] 盗んだ。アードムは機嫌を損ね、彼とイブリースの間で諍いが生じた。ジブリールが彼らの間をとりなし [ブドウを] 半分に分けた。イブリースは自分の分を植え、その根元に小便をしたところ、ブドウは黒い実をつけた。それは酒 [の原料] 用となった。[イブリースが小便をしたこと] ゆえに [そのブドウは] 発酵するのである。その後、サルがブドウを狙ったのでイブリースはサルを殺した。サルの血がブドウの根元に流れた。(p.324) 次の

【王の書】ではこの木を植えた人物はゾロアスターであったとされている [EIr: Goštāsp, Ādur Burzēn-Mīhr]。なお、12世紀のペルシア語史書『バイハク史』によれば、キシマルは木の名前ではなく、グシュタースプあるいはゾロアスターによって糸杉が植えられたニーシャープール近郊の村の名称である。11～12世紀のアラビア語・ペルシア語史書で広く触れているので、当時よく知られた話だったのであろう [Abū al-Ḥasan ‘Alī Bayhaqī, *Tārīḥ-i Bayhaq*, Ed. A. Bahmanyār, Čāpḥāne-ye Kānūn, Tehran, 1938, p.281]。

67) イラン系部族 Xyōns の指導者で、しばしばグシュタースプと対立して戦火を交えた。イスラーム以降に書かれた書物では、トゥーラーンの王で、アフラスィヤープの兄弟 (または孫) として登場する [EIr: Arjāsp]。

68) 『バイハク史』では、Ta‘ālibī (1037/38年没) の『心魂の果実 (*Ṭimār al-qulūb*)』からの引用として、この木がアッバース朝カリフ・ムタワッキルの命令によって切り倒されたという逸話が紹介されている [Bayhaqī, *Tārīḥ-i Bayhaq*, pp.281–282]。

69) 現在、ペルシア語の「ルービヤ」は主にインゲンマメのことを指すが、インゲンは南米大陸のものであり、この時代にはまだ伝来していない。ビールーニーによると、「ルービヤ」は熱帯アジア原産のフジマメを指すようであるが、ここでは便宜上「ルービヤ豆」と訳す [Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fi al-ṭibb*, p.561]。

70) ビールーニーは、サヌアーにあるムハッタムというブドウは1粒が16ディルハム (約50グラム) の重さだと伝える [Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fi al-ṭibb*, p.438]。

日は犬がブドウを狙い、[イブリースは] 犬もブドウの根元で殺した。3日目にはライオンが[ブドウを] 狙ったので、ライオンもその根元で殺してしまった。これゆえ、酒を飲む者はみな、最初はサルのように楽しみ陽気になり、しばらくすると犬のように叫び、もうひと時もするとライオンのようにわめきだすのである。一方、アダム——彼に平安あれ——も自分の分を植えたが、そのうちのあるものは酢となり、またシロップや干しブドウになる。

サヌアーには70種類のブドウがあると言われている。

#### <ヌーン (al-nūn) の項>

「スイセン (narjis)」は効き目のある香草であり、知性に効果がある。ガレノス (Jālīnūs) は、「薄焼きパンを持っているならば、その半分をスイセンの中に置くと、それは脳を助ける。脳とは知性を助けるものだ」と言った<sup>71)</sup>。またヒポクラテス (Abqrāt) は、「スイセンは知性を増す。スイセンは湿っているあいだは効果的だが、乾くと効果がない」と言っている。スイセンの球根の下に藍を少し入れ、それに水をやると、そのスイセンは青色になると言われている。

「ナツメヤシ (al-naḥl)」は[ペルシア語では]「ホルマー (ḥurmā)」である。この木は祝福された木である。木の幹にはねじれた部分がなく、まっすぐな立ち姿をしている。雄株と雌株は識別できる。その一番花 (tal') からは精液の匂いがする。母親の腹から子供が生まれできるように、一番花は木の真ん中から出る。木の先端にある苞を切り取ると、それは[ナツメヤシの] 脳にあたるものなので、木は死んでしまう。根元を掘り起こしたときに湿っているならば、強い[木である]。根元が乾くと弱ってしまい、[他の部分に] 水分が行きわたら[ず、二度と実を結ば] ない。枝を切り落とすと、人間の四肢と同じく元には戻らない。髪の毛のような繊維がある。また種の外側に発芽点があり、子宮のようにそこから芽が出る。ナツメヤシの根は石の中でも伸びていくが、石灰の中では伸びない。

イスカンダリーヤには、「マルヤムのナツメヤシ (naḥla-yi Maryam)」と呼ばれる木がある。分娩の際にその実を食べると、まだ実が若くても十分に甘い<sup>72)</sup>。(p. 325) その地方には[今も] その木があり、樹齢は3000年である、と言われている。また、ハジャルの地には「バーヒーン (bāhīn)」と呼ばれる木があり、年中ナツメヤシの実をつけている<sup>73)</sup>。オマーンの人々はその種を育てようと努力したが、[オマーンでは] 芽が出なかった。アブー・ハーティム・シジスターニー (Abū Ḥātim Sijistānī)<sup>74)</sup> は、「ナツメヤシはイスラームの民に対する創造主からのお恵みであり、不信心者の地にはなく、エチオピア、ヌビア、ザンジュ、ヒンドにもなければ、テュルクにもない。唯一、ベルベルの地にはあるが、それはイスラームの軍が数粒の種を落とすからだ」と言う。

71) 『教養人たちの講義』に、ガレノスの言葉としてほぼ同様の記述がある [al-Rāgib al-Iṣfahānī, *Muḥāḍarāt al-udabā*, vol. 2, p. 573]。

72) この記述は、『クルアーン』19章23-26節の内容に基づく。「だが分娩の苦痛のために、ナツメヤシの幹に赴き、かの女(マルヤム)は言った。『ああ、こんなことになる前に、わたしは亡きものになり、忘却の中に消えたかった。』その時(声があつて)かの女を下の方から呼んだ。『悲しんではならない。主はあなたの足もとに小川を創られた。またナツメヤシの幹を、あなたの方に揺り動かせ。新鮮な熟したナツメヤシの実が落ちてこよう。食べ且つ飲んで、あなたの目を冷しなさい』。

73) 『ペルシア語大事典』によると、年間を通して実をつけ、その半分は常に熟れているというナツメヤシの木 [LN: Bāhīn]。ハジャルはバフラインのオアシス都市であり、ムカッダシーは、バフラインのオアシス都市ハジャルには大きなナツメヤシがたくさんあると伝えるが、木の名前には触れていない [al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsim*, p. 93]。

74) バスラ地方の村であるシジスターン出身のアラビア語文法家(869年没)。イスラーム以前のアラビア語詩人についての著作が知られている [EI<sup>2</sup>: Abū Ḥātim al-Sijistānī]。

その木はまっすぐなまま天井に渡すと折れるが、二又にすると折れない<sup>75)</sup>。

この果実(ナツメヤシ)はイスラームの地にしかない。[不信心者のベルベルの地にあるのは]ちょうど、イスラームの地にある大きな河川がいずれも不信心者の地から流れてきているのに、「アースイーの川 (Nahr-i ‘Āṣī)」<sup>76)</sup>のみはイスラームの地から不信心者の地へと流れているようなものである。その「川の」名はもともと「逆らう (‘āṣī)」[という語]に由来する。

「ココヤシ (nārjīl)」は「ペルシア語では」「ヒンドのクルミ (jawz-i hindū)」のことである。砕いて水を混ぜると、乳のようになる。若いブドウの汁を混ぜると、乳清になる。寄生虫 (kadū-dāna) を腹から出す。タールは海水に溶けるので、[かわりに] その樹皮で船を結わえる。これを「キンパール (kinbār)」と呼ぶ<sup>77)</sup>。ココヤシはシャラーヒトの島<sup>78)</sup>に生える。動物たちはその汁を飲むと酔ってしまう。そうなってから人々は狩りをする。かの地には山があり、そこからは高さが数千アラシュにもなる巨大な火柱が上がる。

[かつて] 1個のココヤシがヒンドの海(インド洋)からもたらされた。それは「水の人」が持ってくるので、誰もそれが生えている場所を知らない。「水の人」はそれを岸に置き、交換で鉄を持っていくが、彼らが鉄で何をするのかは誰も知らない。知識はアッラーの御許にある。

#### <ハー (al-hā’) の項>

「ミロバラン (halīla)」はカーブルの町にある。まだ熟していないものを「黄色 (aṣfar)」、熟したものを「カーブルもの (kābulī)」、木についたまま干からびてしまったものを「黒色 (aswad)」と呼ぶ。ミロバランは祝福され、効き目ある薬であり、とりわけ悪くなった胃を正常な状態に治す。また、人を気鬱 (mahūliyā) や黒胆汁質 [の症状] から救い、神経を強くし、消化を助ける<sup>79)</sup>。言われているところでは、ある老人が毎日それを1ディルハム分ずつ食べていると、若返り、抜けてしまった歯が生えてきたという。(p.326) これはあり得ないことだが、しかし「ミロバランは」健康や力を増すものであり、この薬のさまざまな益や有用さに疑いはない。

#### <ワーウ (al-wāw) の項>

「バラ (al-awrād)」には白、黄、赤などさまざまな種類がある。ザーボル<sup>80)</sup>産 (zābulī) とファールス産 (fārsī) が最も美しい。蛇や動物たちがそれを好む。ザーバジュ<sup>81)</sup>の地には美しいバラ (gul) があり、それは冬にも夏にもあるが、そこから運び出されると燃えてしまう。マズハル・ブ

75) ナツメヤシの木のことを述べているとしても、この一文がここに入るのは不適切である。

76) 現在のシリアとトルコを流れるオロンテス川のこと。アラビア語の「アースイー(反逆者)」という名前は、他の川とは違った方向に流れるためともされている [Le Strange, *Palestine under the Moslems*, Alexander P. Watt for the Committee of the Palestine Exploration Fund, London, 1890, pp.59-61]。

77) ココヤシの繊維を燃した縄のこと。『医学における薬物の書』のココヤシの項でも同様に、塩水に触れても長持ちする縄として言及されている。またイブン・バットウータは、モルディブで用いられていたキンパール(以下の訳文では「カンバル」と表記される)について、「カンバルとは、ココ椰子の実の繊維のことで、島民たちがそれ(ココ椰子の実)を海辺の穴の中で[漬けて腐らし、皮をなめすように]柔らかくし、棍棒で打ち叩いた後、女たちがそれを糸に紡いだもので、これを使って船を縫合するための紐縄が造られ、シナヤインド、イエメンに輸出される。それは、大麻の繊維をより合わせてつくった縄より優れている」と伝えている [LN: Kinbār; Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fī al-tibb*, pp.400-401; イブン・バットウータ『大旅行記』(家島訳注)、6巻206頁]。

78) スマトラ島、あるいはマラッカ海峡からアンダマン海にある島のいずれかのこと。本訳注(4)、492頁、注56参照。

79) 『医学典範』の“halīlaj”の項を参照のこと [Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, vol.1, p.297]。

80) イラン=アフガニスタン国境の都市。およびその一帯の地域。本訳注(5)、423-424頁参照。

81) ジャワ島やスマトラ島にあった王国であるザーバジュについては本訳注(4)、496頁、注82参照。

ン・サフル・アル＝スィーラーフィー (Maghal b. Saḥr al-Sīrāfi) がそのバラをかなりの量集め、敷物に包んで運び出そうとしたところ、海から火が立ち起こり、バラを焼き尽くしてしまった。これは [実に] 珍しいことである。またアルメニアには、黄疸の黄色を取り除くバラがあり、チベットには、[その匂いを] 嗅いだ者が黄色くになってしまうバラがある。サフラン (za'farān) にも同じ働きがあり、食べた者はみな赤ら顔になる。バラの油を猫の鼻に塗ると死ぬ。早朝、初咲きの新鮮なバラの花を左手の3本の指で1つ摘みとり、目に擦りつけると、その年は [目が] 痛くならない。バラは心臓を強くし、便を詰まらせるか、下痢を止める。

<ヤー (al-yā') の項>

「マンドレイク (yabrūj)」はアッラーン<sup>82)</sup>にある草木で、地面から生えている。人間のよう巻き髪があり、その匂いは人を眠らせ、液汁は致死性の毒である。それを地面から引き抜く者は誰であれ死んでしまう。そのため、[採取する場合には] 紐をそれに結びつけ、その紐の端を犬の胴に結ぶ。それから犬に肉を見せると、犬は肉の方に向かうため、マンドレイクが抜け、犬は死ぬ。1本が10アラシュ [の大きさ] になることもある。その境域には [別の] 草があり、それを身につけた人は笑い出し、身をよじるほどであるが、捨てると [今度は] 泣きだしてしまう。

[逸話]

私は『ルームの歴史 (Tārīḥ-i Rūm)』<sup>83)</sup>の中で次のような話を読んだ。

イスカンダルは北の境界に至り、大きな川を (p.327) 見た。彼は渡ろうとしたが、軍は彼を引きとめた。岸の端まで来ると、[イスカンダルは] 雷のような恐ろしい音を聞いた。人々は彼に言った。「この川の岸には大きな林があり、そこには1本が300アラシュもある巨大な木々があります。その林には昼夜となく風が吹き、木々が互いにぶつかり合っています。この音はその風の轟きです。創造主はその木にとまる1羽の鳥を創造されました。それは何色ものきれいな色をして、人間のような姿をしています。それは林から出ることもせず、この風を避けることもしません。」

イスカンダルは岸に着くと、その林の情報を得ようと人を遣わした。[偵察の男が林の] 中に入るや否や、ライオンが彼に襲いかかった。彼は木の上に逃げた。ライオンと川と風への恐怖から男はどうすることもできなかった。[ちょうどそのとき、1羽の鳥がやって来てその木にとまった。] 男は鳥の足を掴んだ。鳥は飛び立ち、岸へ向かった。男は鳥の足を離して降りると、イスカンダルに「これ以上先に道はありません」と報告した。

こういった類の話は数多く伝えられているが、私はよく知られているものを抜粋して [ここに] 記した。

次章では、未知の木々について伝えられている限りを引用しよう<sup>84)</sup>。

82) コーカサスの一地方。本書の「アッラーン」の項でもマンドレイクの話が記載されている [本訳注 (5)、382頁]。

83) どの史書のことを指すのかは不明。

84) 次章は、「大きな木」や「木」といった見出し語があるが、これは本書が絵入りの書物であることと関連する。本書や、次代のカズヴィーニーなど、『被造物の驚異』と題される書物では、多くの写本でそれぞれの項目に絵が付けられており、なかでも木や植物に関する章は、ほとんどの植物の絵が描かれている (もっとも、後世の写本では絵の箇所が空欄のまま空けられていることも多い)。本訳注では図絵はすべて割愛しており、本章では本訳注の底本とした校訂本にも挿し絵となる図絵が載せられていないため、「図省略」などの語は訳文中に入れていない。だが、次章のように名称のない木々が独立した項目として挙がるのは、本文テキストが図絵の紹介文となっているためである。

## 第2章 珍しい未知の木々の驚異について

イエメンの地のマフラの境域には1本の木があり、その木からは水が滴る。サバーフ・ブン・バナウイー (Šabāh b. Banāwī)<sup>85)</sup> は言う。「聖なる月になると水がこの木からあふれ出し、諸々の貯水池を満たす。聖なる月が終わると、水は止まる。」

サランディープの地方には、黒い水の中から突き出た島がある。そこには真水がない。他方、島には種々の葦 (nīza-hā wa qalam) が生えている。葦の根に穴をあけると、澄んだ水が流れ出る。葦は黒い水を吸い、真水を供するのである。これは喩えるなら雲のようなものである。[雲は] 濁った水を吸い上げ、真水を降らす。

(p.328) 「ある海の木 (šajara baḥrīya)」。マグリブ (西) の境界に海があり、そこに水晶のように白い木が現れては海の中を動き回る。それが現れる年は豊作である。マグリブの王はその木を鎖で縛り、それを山に繋ぎ止めた。ある日、その木は激しく動き回り、ついには鎖を断ち切り、消えてしまった。長い時が過ぎた。マシュリク (東) の方から一団の者たちがやって来た。王は町々の様子を尋ねた。1人が言った。「マシュリクの境域には海があり、そこには1匹のカメがいて、その背中には白い骨からなる1本の木が生えています。いつもいなくなってしまうのですが、最近、現れたところ、鉄の枷が体に縛りつけられていました。どうしてそうなったのか、またこの枷をどこから運んできたのか、我々にはわかりません。」

そこで王はくだんの話の彼らに聞かせた。

「ある大きな木 (šajara kabīra)」は12ファルサング先からも見える木で、「マアウィーン (M'WYN)」と呼ばれ、700本の枝がある。たくさんの種類の鳥がそこにとまる。毎年1回、[木は] 自らを揺らし、鳥の糞を下に落とす。それは、その地方全土 [の肥料用] に事足りるほどである。

キーマーク<sup>86)</sup> の境界は寒い。そこには1本の木があり、その木の下に行くと誰も熱を感じる。10歩先に行くと寒くなる。もしこの木の下で火を起こすと、雨が降る。これは珍しいことである。

「スズメの木 (šajara al-'ašāfir)」は岩石<sup>87)</sup> の地方にある木で、そこには大きな蛇たちがいる。秋 (mihragān)<sup>88)</sup> になると、この木はたくさんの葉を落とす。数日後、[落ちた葉の] すべてはスズメに変わり、飛んでいく。賢人たちは、「ソラマメはハエに変わって飛んでいく」と言う。

「[リスの] 木」はキルギスの境界にある木で、リスがその木の上に暮らし、それを食べる。この

85) テキストでは BAWY, ma 写本では Šabāh b. al-Balawī, サードギー校訂本では, Šabāh b. Balawī となっている。ここでは底本校訂者の脚注に、Banāwī とあることに従う。ただしこの人物については、いずれの表記からも特定できない。

86) イルティシユ川流域のテュルク系の部族の名。本訳注 (4)、498 頁、注 96 参照。

87) ŠHR という地名は見当たらないので、ここでは固有名詞ではなく、「岩の多い場所」という意味でとる。ただし『諸都市辞典』では、中央アジアのマルヴに Šahrābād という村名が挙がる [Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 3, p. 390]。

88) 原語の「メフラガーン」はイラン古来のゾロアスター教関連の祝日であり、メフル月 (第7月) のメフル日 (16日) に行われる祭りを指す。現在では、10月9日前後に相当する。

リスを嘴でつくろう鳥がいるが、リスはその鳥から逃げていく。

「安らぎの木片の木 (šajara-yi ḥašaba al-faraj)」はイーラーク<sup>89)</sup>にある木で、それは、赤と黄の色をした鳥のみが知っている。人々はその雛の足を2本とも縛る。母鳥は飛んでいき、その枝を持ってきて (p.329) 置くと、雛の足枷がほどける。

「[タールの] 木」は、樹脂がタールの木である。その枝を切ると、樹液が流れ出し、タールになる。熱質かつ乾質で、第4級である。死者の体を保存する。

「カールーの木 (šajara-yi KARW)」<sup>90)</sup>はケルマーンの境界にある木で、[長い枝があり、] 枝先からはそれぞれ1本の縄が下に垂れている。子供たちはそれで遊ぶ。その木には実がなるが、実は益もなければ害もない。

「焼きごての木 (šajara-yi kāwī)」は葉が苦い木であり、鼻から血を出させる。この木には火はまったく効かない。キリスト教徒たちはその木から十字架を作る。火にかけても燃えない。「イーサー——彼に平安あれ——の十字架からできた」と言われている。

「[蜜の] 木」はホラズムの境域にある木で、そこに穴をあけると、蜜が流れ出す。人が1ラトル<sup>91)</sup>飲むと酔ってしまう。

さて、以下のことは驚くべきことではない。いかなる賢人も1滴水さえ[体の内部で]吸い上げることではできないが、木々の幹や根は水を吸い上げ、木の上部に運ぶ。そうして[神のお力によって] [水は] 実や仁になるのである。

「[羊毛の] 木」はマグリブの境域にある木で、その果実は羊毛のようである。女たちはそれを紡ぎ、ズボンを織る。まず花をつけ、そして羊毛でいっぱいの小箱ほどの大きさの房ができる。

「[オウムの] 木」はヒンドゥスターンにある木で、そこにはオウム以外とはまらない。ヒンドの人々はこの木に跪拝し、「[この木は] 天国のもので、この鳥は天国からの鳥である」と言う。この木に傷をつけると、血のような赤い液が出る。

「[灯火の] 木」はシャームにあり、クワの木 (tūd) のようである。葉はそれぞれ灯火のように輝いているが、[触れても] 手がやけどをすることはない。葉が落ちると消えてなくなってしまう。枝の一部は、水で腐ることがないため (p.330) 水車の中で用いられる。古くなると裂ける。暗い夜には火のように輝く。

ヒンドの人々は、彼らの地方にある1本の木を誇りにしていた。[その木は] 昼には灰色だが、夜には輝き、数ファルシング先からも見える。ヒンドゥスターン全土でこの木は3本あった。パー

89) シル川流域の地名。本訳注(4)、499頁、注99参照。

90) ペルシア語の kārū には「雁」の意もあるが、文脈に合致しないので、ここでは固有名詞ととる。

91) 重さの単位。おおよそ400グラム強。

ビル（バビロン）にはもっとたくさんあった。だがバービルはひっくり返されて [滅び]、すべてが失われてしまった。

珍しい木々については、すでに述べたこの程度で十分であろう。[話の] 責任は話し手にある。さて、人間の性質や人体に関する第6部を述べよう<sup>92)</sup>。至高なるアッラーが望みたまうならば。

---

92) 実際には、人体に関する章は第6部ではなく、第7部である。第6部は預言者・帝王・英雄らの画像や墓、財宝について述べられる。